

第 55 回国際経済協力セミナー

国連食糧農業機関(FAO)の役割と活動

講演者：横井 幸生氏

国際植物防疫条約(IPPC)事務局 事務局長

文責：永井哲平

草案作成：石川智司 遠藤茜衣 佐藤百 高世濤
中野遥香 宮本陸也 柳瀬愛乃 吉本真理子



講演者の横井氏は東京大学農学部農芸化学科卒業。大学生時代はスキー部に所属し精力的に活動。国家公務員として農林水産省に入省し、一時期環境庁（当時）にも勤めておられた。米国コーネル大学に留学し、大学院修士課程を修了。JICA、JETRO への出向、OECD への派遣、さらに学習院女子大での勤務経験も持つ。そして、現在 FAO 内の国際植物防疫条約事務局で事務局長として働いらっしゃる。

●国連食糧農業機関 FAO (Food and Agriculture Organization of the United Nations)

1945年設立（日本は1951年加盟）本部：ローマ（イタリア）加盟国は194+EUで、実質国連の加盟国と同じである。WTOよりも規模が大きい。（WTOは加盟の際に全加盟国と一定の貿易交渉が行われるため、簡単には加盟できない）

世界各国の国民の栄養水準および生活水準の向上、食糧および農産物の生産、流通の改善、そして農村の住民の生活条件改善による世界経済の発展などを旨とする。世界の食糧事情に関する調査分析から最新情報の発信（疫病の流行など）、国際条約の執行まで、幅広い業務を執り行う。途上国において現場支援活動を行い、農業支援も行っている。（例：優良種子や改良品種を用いてその地域に合った農業を行う。アフリカで農作物に被害を及ぼす“砂漠バッタ”に対処する）たとえば魚を与えるのではなく、魚を釣る方法を教える、魚を釣る道具を作る方法を教える。といった風に間接的に課題を解決する考えが重要。FAOは国際連合の専門機関。「国際連合」はこういった多くの専門機関など多様な機関と提携をして成り立っていることを理解すべきである。

FAOの主たる目的は飢餓撲滅であり、そのために「食べる」「作る・届ける」「生きる」という三つの柱にそって活動しているという。飢餓と聞いて、多くの人々はアフリカを思い浮かべるが、人口の割合を大陸・地域ごとに円グラフにしてみると、サハラ・アフリカが27%であったのに対し、南アジア35%、東アジア19%、東南アジア7%とアジアの方が圧倒的に多いことが分かった。限定された視点ではなく、多面的に物事をみることの必要性を訴えられていた。FAOの事務組織についての説明では、3,600人の総職員数のうち日本人は約50人であり少なく、日本人の国際機関への積極的な進出を望んでいるとおっしゃった。それからFAOの活動について食糧サミットをはじめとした議論の場を提供すること、世界の食糧・農業の現状について調査研究すること、世界各地に赴いて現地で支援活動をおこなっていることを説明された。

世界の貧困状況を表す図を見てみると、世界地図では圧倒的にアフリカが貧困に陥っているかのように見えるが、東アジアと南アジアもアフリカと同程度の栄養不足人口を抱えている。これは中国、インド、パキスタン、バングラデシュといった国々の存在が反映されたものと思われ、多角的な見方が必要であるとわかる。

現場での支援活動の例としては、ウガンダでの稲作生産支援があげられる。ここではJICAを中心に日本が行っている支援との協同活動が進められている。長細いインディカ米はアフリカの土地にいる害虫や病気に強いがカロリー（栄養分）が少なく、日本や東南アジアで生産されているジャポニカ米はたくさん採れ栄養分も豊富だがアフリカでは育てづらい。そこで、両方のよいところをミックスした品種が開発された。New Rice for Africaの頭文字をとってNERICA米と呼ばれている。

FAOは18の国際条約の事務局を提供している。たとえば、この後詳しく説明する国際植物防疫条約(IPPC)のほかに、食糧農業植物遺伝資源条約にも事務局を提供しており、この条約では、将来新薬開発などで役に立ちうる植物の遺伝子を保存する活動を行っている。

●IPPC（International Plant Protection Convention：国際植物防疫条約）

植物や自然環境を病気や害虫から保護することを目的とした FAO が事務局を提供し、横井氏が事務局長を務める国際条約である。この IPPC の目的は、植物を病気や害虫から保護する一方で、保護が過剰な貿易制限とならないよう確保することであり、最近は後者に重点を置いているという。

IPPC の原形は、約 150 年前にぶどうの害虫が北米からフランスに侵入した際に周辺 のヨーロッパ 5 か国間で結んだ協定であり、国際連盟発足よりも以前である。ワインの生産に支障がでることを懸念した諸国が協力したことが始まりだという。IPPC の条約としては 1951 年に採択され、2 度の改正を経て、2013 年 12 月末時点で 181 の加盟メンバーがいる。また、WTO の衛生植物検疫 (SPS) 協定と密接な関係があり、他にも様々な国連関係機関と協力して課題解決に取り組んでいる。IPPC の本部はローマの FAO 本部内にある。残念ながら現時点での知名度は高くないもののその役割は非常に重要であることを、様々な具体例をあげて紹介していた。

横井氏自身は、農業についての知識をある程度有しており、同僚の中には専門科学知識に優れている者もいるが、必ずしも全員がそのような専門知識を持っているわけではないことを述べ、「相互のコミュニケーション能力が重要である」と語った。

●キーワード

・ 飢餓問題

まず、最初に FAO についての説明を受けた。飢餓という言葉ひとつだと、私たちはアフリカを真っ先に思い浮かべてしまうが、実際はアジア圏での飢餓者が世界でも圧倒的に多いという。アフリカでは政情の安定しない国も多く、気候の厳しい地域も存在するが、広範囲に見た場合、南アフリカ共和国のように豊かな国も存在する。一方で、人口の多い中国やインドが存在するアジア圏では同じように飢餓人口も多く、現在世界でもっとも飢餓人口の多い地域となっている。先生はこのように私たちの意識を覆してくださいました。

・ 世界トイレの日大事、もう 1 つの”WTO”

今回話題の対象となっている IPPC は世界貿易機関 (WTO) との関係が重要であるが、WTO の正式名称に関連して、世界貿易機関以外にも世界観光機関 (World Tourism Organization) と世界トイレ機関 (World Toilet Organization) という組織が存在し、後者は世界のトイレの状況改善に努めているという。笑ってしまうようで大切な役割を持った団体。日本では公衆トイレの洋式便器には当然便座がついているが、先生の滞在するイタリアでは便座がついていない公衆トイレが多く存在しているようだ。日本のトイレ技術は世界でも突出しており、日本のトイレメーカーの技術が世界へ発信され、世界のトイレ環境を整える大きな力を担っている。

・ 成田空港などでの植物の検査

空港で果物や植物などの持ち込みを禁じられた経験がある人も多いだろう。この条約が作られた理由として、過去のフランスで起きた例をあげられた。ある虫が入り込んだ。その虫によってフランスの主要産物であるブドウの木が枯らされ、フランスの経済に大きな打撃を与えてしまうような事

件がおこった。幸い、フランスは新たな種のブドウに植え替え、逆に生産量を増加させて逆に成功をおさめた。

- ・国を越えたルールの必要性とは

先生が率いていらっしゃる部署では植物防疫分野での国際条約を取り扱っているが、そもそも一般的に国際条約の起源は何をきっかけとしたのかについても話された。国際条約が必要とされた最初のきっかけは、やはり通信手段や移動手段としての郵便や船での入港の際だろう。国を超えた共通の条約に加盟する際にはさまざまな条件を満たさないと許可されない場合もあるが、その理由はさきに加盟した国が不利になるのを防ぐためである。

- ・個人として見て距離を縮める

国際コミュニケーションに関して、日本人として是非聞いておきたいお話もされた。サッカー選手の本田を例として、英語の文法を気にするよりも、ジョークを織り交ぜながらも自分の個性や意志をしっかりと伝えられるコミュニケーション力を磨くことが重要だという。

- ・マイナー言語の人々への思いやり

世界的にはマイナー言語である日本語を母国語とする私たちは、英語やフランス語などの国際語ができるようになるについつい忘れがちであるが、言葉のコミュニケーションで苦勞しているのは我々だけではない。他の数の少ないマイナー言語の人々を思いやる気持ちを特に意識し続けるべきであろう。

- ・コミュ好きになる

国際社会での発言力を高めるには、やはりコミュニケーションを好きになるべきであり、自らの引き出しを増やし、会話を自分から始め、続ける力を鍛えるべきである。

- ・大切な“コミュニケーション能力”とその中身

Twitter や Facebook でコミュニケーションを取ることのできる現代は非常にいい時代。英語で外国人とやりとりをしている若い世代を多くみかける。一方で、いくら語学が堪能でも、中身のある会話ができなければ意味がない。自分の中身を相手に伝えることのできる事が重要。

●「海外で、国際機関で働くためには？」・「国際コミュニケーションの工夫」

英語力は必須ではあるものの、コミュニケーションを通じて相手の心を開くことが大切。サッカー選手である本田選手の例をあげて、流暢な英語でなくても、自分らしさや自分の伝えたいことが相手に伝わればよい、という。国際社会、国際機関をより身近に感じてほしいという思いから、いかにその仕事がすばらしいと同時に、もっと身近なものであることを語っていた。そして、インターネットや SNS で世界中の人々との気軽な交流が可能になった現代の若者のコミュニケーション能力をみて、一層多くの若者の国際社会への進出に大きな期待をよせているとおっしゃった。そのうえで、日本人であることのマイナスイメージにとらわれることなく、「勤勉」・「協調性にすぐれ

ている」・「時間や約束をまもる」といった私たちにとって当たり前のことを強さにしていくべきだ、という心強いメッセージを送ってくださった。

また、英語以外にも国連公用語のフランス語、スペイン語、中国語、ロシア語、アラビア語があり、これらのうちのいずれかを少し話せることが必要。ほとんどの人は英語以外を母国語として理解していることを理解。話せるだけでなく、自分の考えを発信する能力を示すことができるといった、いわゆるコミュニケーション能力が不可欠、国連機関を高いところにおいて、可能性を諦めるべきではない、また、日本人のもつよい気質を大事にすべきとお話ししていただいた。

●意見

今回、横井さんの講演を聞いて初めて IPPC(International plant protection convention)の存在を知った。また、分野ごとに(1)食品安全の CODEX、(2)動物衛生の OIE、(3)植物衛生の IPPC と、衛生問題に国際機関が取り組んでいることを初めて知った。FAO は加盟国が他の国際機関と比べて多いのは加盟条件が比較的緩いためということもありより広範囲で食糧問題や衛生問題を議論、検討したいという意味を強く感じた。また、IPPC という枠組みを基に例えば農業面は FAO 内の他の部署と、貿易面では WTO や OIE など様々な国際機関と協力して問題解決に取り組んでいることはとても柔軟で能率的であると思った。FAO の本部がイタリアのローマにある特別な理由があるのか疑問に思った。将来、国際人として働きたいと思っているので世界が様々な枠組みの中で絡み合い協力しながら課題に取り組んでいる一つの実例として IPPC を知ることができてよかった。FAO という国際機関の存在は知っていたが、具体的な役割や国際社会の中での位置づけなど FAO という国際機関を通して様々な角度から世界をみる観点を養うことができてよかった。質疑応答の中で、国際機関の中で働くことの魅力について横井さんは「日本、日本人、しいては自分を世界の中から客観的に見ることができる機会を得られる点は魅力だと思う。」と仰っていており、日本国内では得がたい機会を国際機関の中でつかむという考え方にとても感動した。また国際機関の中で日本人の特徴である「口数が少ないが嘘はつかない」「まじめに働く」といったことを全面に出して評価を得るといふ日本人としての誇りをもって世界で働いていることは素晴らしいことだなどと思い、また同時に日本のことがとても好きな方なのだなとも思った。

講演開始直後から、ジョークを交え会場を和やかな雰囲気にし、若者が興味を持っていそうな有名歌手の話題を出して、聴き手の心をしっかりとつかんでいたように思えた。途中ユーモアを交え最後まで面白く飽きない、ためになるお話がたくさん詰まった講演であった。